様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 ２６ 日現在

機関番号：１２７０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2016～2023
課題番号：１６Ｋ１６４９１

研究課題名（和文）創作ダンス指導における「動きをみる力」を高めるためのカリキュラムの作成と検証

研究課題名（英文）Creation and verification of a curriculum to enhance the "ability to see movements" in creative dance instruction

研究代表者
山崎　朱音（YAMAZAKI, Akane）

横浜国立大学・教育学部・准教授

研究者番号：４０６０９３０１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では，創作ダンスの授業で「即興表現」を指導する際に発揮する「動きをみる力」を明らかにすることを目的とした。熟練指導者の特徴から「ひと流れの動き」の検討と動きを引き出すための指導の重点，授業実践記録から「即興表現」「ひと流れの動き」の解釈，視線の計測からダンス経験差による動きの着眼点の相違を明らかにした。
「動きをみる力」は,「ひと流れの動き」にするための指導と評価の力と換言できる。質感・変化・連続性を重点に指導／評価するが，その際の具体的な動きをみる視点として，空間・リズム・体が挙げられ,さらに学習者の身体の末端と体幹部に着目することで極限的な体の使い方を促すことができることがわかった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
探求型の運動学習である創作ダンスは，技能の到達目標が一定ではないという特性から，他の運動領域に比べて指導が難しいことが指摘されている。また，ダンス必修化以降，ダンス指導に不安を感じている教員が少なくない。そのため，指導と評価の視点を明らかにした本研究の成果は，創作ダンスの技能評価を容易にするとともに，教員の授業実践への一助になることが想定され，その点において社会的意義がある。
さらに,明らかになった理論を活かした教育実践に繋げるためにも,研究の成果を現職教員に広く伝達する必要がある。これを見越して行う本研究は,学術的にも意義があると考える。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to clarify the "ability to observe movements" when teaching "improvisational expression" in creative dance classes. We examined the "sequence of movements " from the characteristics of expert teachers and clarified the emphasis of instruction to bring movements out, the interpretation of "improvisational expression" and "sequence of movements " from the practice record of the lesson, and the difference in the focus of movement due to the difference in dance experience from the measurement of gaze.

The ability to observe the movement can be described as the ability to guide and evaluate the movement in order to make it a "sequence of movement." It was found that space, rhythm, and body were cited as perspectives for examining specific movements in the course of instruction/evaluation with an emphasis on texture, change, and continuity, and that the extreme use of the body could be promoted by focusing on the ends of the learner's body and the trunk.

研究分野：舞踊教育学

キーワード：創作ダンス　即興表現　指導と評価　ひと流れの動き　視線

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９，Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

2008 年改訂の学習指導要領から中学校 1・2 学年でダンスが必修化（文部科学省，2008）され，男女全ての生徒にダンスを経験する機会が保障された（伊藤，2008）と同時に，指導経験のない教員がダンス授業をする機会が増加することになった。これにより，全ての教員にダンス授業をするための実践的指導力の向上が問われている（友添，2008；柴田，2008）。この現状に対して，指導への不安の声やダンス必修化への否定的な意見が聞かれている（中村，2009a）。また，探求型の運動学習である創作ダンスは，技能の到達目標が一定ではないという特性から，他の運動領域に比べて指導が難しいことが指摘されている（中村，2009b）。

創作ダンスの技能は，「即興表現」と「作品創作」に区分される（文部科学省，2008）。即興表現に関する教師の指導としては，予測することができない学習者の動きに対し，指導言語などで即時に対応して学習者の動きを引き出す，即興的な指導が求められている。この即興的な指導こそが，現職教員には創作ダンス指導の難しさと捉えられている（成瀬ほか，2014；山崎，2013b）。即興的な指導には，学習者の動きをみて即座に判断する「動きをみる力」が必要であり，この力を養うことが創作ダンスの指導力向上につながると考える。

山崎ほかは，創作ダンス指導の熟練指導者（舞踊教育専門家）と未熟練指導者（現職のダンス指導経験の少ない教員）の指導言語とその意味の相違に着目し，実践研究を通して，即興的な動きを指導するための学習者の 10 個の動きをみる観点（指導と評価の観点）を抽出した（山崎ほか，2014a）。また，これらの観点を，経験の違いによる観点の相違に着目し，構造化して段階的に位置づけるとともに，これらの観点の相違は，熟練指導者が長年蓄積してきたダンスに関する専門的知識，経験の違いであることを示唆した（山崎，2014b）。このような熟練指導者の持つダンス指導における専門的知識を，特に創作ダンスの指導に自信がない教員へ端的にわかりやすく伝えることは，「即興的な指導」の実現に向かうことができると考える。

創作ダンスで何を教えるのか，学習指導要領では創作ダンスの知識及び技能として「多様なテーマから表したいイメージをとらえ，動きに変化を付けて即興的に表現したり，変化のあるひとまとまりの表現にしたりして踊ること」（文部科学省，2008）が挙げられている。特に即興表現に対応するねらいとして，多様な題材やテーマから思いつくままにとらえた動きを誇張したり変化を付けたりして，「ひと流れの動き」にして表現することが示されている（文部科学省，2008）。しかし，この「ひと流れの動き」が指導経験年数の長い教員にも理解されにくい（山崎，2013）ことから，基準の共通理解の必要性が指摘されている（大橋，2013）。

指導と評価を一体とした即興的な指導を行うためには，指導する教員へ創作ダンス授業において「何を教えるのか」の指導の視点，特に「ひと流れの動き」への理解を促す必要がある。そして学習者の動きを即時に指導するための「動きをみる力」を向上させることが必要であると考えた。

２．研究の目的

本研究の目的は，現職の保健体育科教員が創作ダンスの授業において「即興表現」を指導する際に発揮される「動きをみる力」を明らかにすることにあった。そのために，下記の３点について検討を進めた。

（１）「ひと流れの動き」の検討と学習者の動きを引き出すための指導の重点

指導と評価は一体のものと捉えられることから，「動きをみる力」は，授業内の「指導」と「評価」の場面で同時に発揮されるといえる。そのため，はじめに指導者が創作ダンスの授業において，学習者に何を学ばせるのかという指導内容を明確にする。特に知識及び技能に示されている「ひと流れの動き」とはなにか，「ひと流れの動き」を引き出すために指導者がおさえるべきことを明らかにする。

（２）「即興表現」ならびに「ひと流れの動き」の解釈

授業実践の記録において，「即興的に踊る」「ひと流れの動き」がどのような語として出現し，どのような関係性があるのかを検討することにより，授業実践の中で「即興的に踊る（以下，即興表現とする）」ことと「ひと流れの動き」の捉え方と双方の関係を明らかにする。

（３）ダンス経験差による動きをみる視線の相違

教師の即興表現指導時の眼球運動の測定から視線パターンを検討し，実際に指導者が学習者の動きの「何／どこ」に注目したのかを明らかにし，視覚情報から何を評価しようとしたのかを明らかにする。

３．研究の方法

（１）「ひと流れの動き」の検討と学習者の動きを引き出すための指導の重点

ダンス授業熟練指導者４名とダンス授業未熟練指導者４名を対象とし，それぞれ異なる学習者４名に対して教材（「新聞紙を使った表現」を事例とした）と指導場面を限定した指導実験を

行い，動きを引き出す指導場面の新聞紙の扱い方（動きの提示の仕方）と指導言語をデータ化して両者の比較を行った。指導実験の映像と逐語記録から，全員が共通で取り上げた＜新聞紙を投げる＞とその前後の動きを限定し，その際の各指導者の新聞紙の扱い方（動きの提示の仕方）と発せられた指導言語について，両者の指導の特徴を明確にして比較することにより，学習者の動きを引き出すために指導者がおさえるべきポイントを考察した。

（２）「即興表現」ならびに「ひと流れの動き」の解釈

対象資料は，（公社）日本女子体育連盟が刊行する「女子体育」のうち，2009 年から 2019 年に発刊された小学校・中学校・高等学校・大学（大学は教員養成の授業のみ）の表現・ダンス実践研究が報告された記事が含まれる 49 冊とした。そのうち実践研究報告 118 編から「表現・創作ダンス」を取り上げた記事 93 編を抽出，さらに「即興表現」・「ひと流れの動き」に関する記述があった記事 55 編を抽出し，分析の対象とした。「即興」・「ひと流れの動き」について述べているパラグラフをすべてテキストデータに変換し，KH coder３でテキストマイニング分析を行った。

（３）ダンス経験差による動きをみる視線の相違

教員養成課程に在籍する大学生のうち，ダンス経験者と未経験者各５名を対象とし，Talk Eye Lite（竹井機器製）（以下，アイカメラ）を装着してダンサー１名が踊る静止画を視観察した後，その動きの評価について発言する実験を行った。アイカメラにより計測した静止画を観察する際の視線パターンは，1 秒ごとの連続写真とし，発言時の内容と対応させて整理するとともに，視聴時の発言を，KH coder を使用してテキストマイニング分析を行った。抽出後の頻出回数を単純集計するとともに，共起ネットワーク図の作成を行った。

４．研究成果

（１）「ひと流れの動き」の検討と学習者の動きを引き出すための指導の重点

熟練指導者の指導の特徴には，新聞紙の質感を捉えた動きを引き出そうとしていること，質感の異なる動きを連続して提示していること，１つの新聞紙の動きの過程（変化の様相）を表現させようとしていること，新聞紙の動きの質感を指導言語と掛け合わせることが挙げられた。未熟練者の指導の特徴には，新聞紙の形を真似した動きを引き出すこと，扱う新聞紙の動きが１つずつ単発で前後の動きとのつながりが少ないことがわかった。

両者を比較することにより，「ひと流れの動き」を引き出すためには，「連続性」「質感」「変化」の視点を指導者がもつことが必要であることがわかった。

学習者の動きを引き出すための指導の重点として，指導者が学習者の動きを引き出す場面では，指導者自身が新聞紙のもつ質感を十分に理解した上で，多様な新聞紙の質感を経験できるような新聞紙の扱い方を提示することが考察された。また指導言語と掛け合わせながら動きを提示すること，そして多様な質感の新聞紙の動きを組み合わせて連続性を持たせることを意図的に行うことにより，学習者相互の活動場面での「ひと流れの動き」につながることがわかった。また，このような多様な質感の新聞紙の動きを組み合わせることが，変化やメリハリのある動きにつながると示唆された。

（２）「即興表現」ならびに「ひと流れの動き」の解釈

対象資料とした実践研究報告に記された語の関連を検討した結果，「即興表現」と「ひと流れの動き」の語は，「動き」や「イメージ」「テーマ」「変化」などの語とネットワークを形成していた。このことから，「即興表現」と「ひと流れの動き」の関連として，「テーマからイメージを捉えて即興的に動くこと，そしてそれに変化を加えてひと流れの動きにしていくこと」が，授業実践の中で指導者に理解されていると示唆された。「即興表現」は「学習」「活動」との結び付きも確認されたことから，学習過程の中でも捉えられている語であることがわかった。

また「ひと流れの動き」と関連している「変化」は，「空間」「リズム」また「体」とも関連していた。このことから，いわゆる学習指導要領でいわれている「変化をつけたひと流れの動き」にするためには，空間・リズム・体の変化といった観点からの工夫を促していることが示唆される。しかしながら，ここでは相場（2010）や村田（2011）が示した視点である「対極」「緩急強弱のメリハリ」が出現していない。このことから，時間・空間の視点より力性に視点を置いた変化の付け方は捉えにくい点であることが推察される。

以上のことから，「即興表現」と「ひと流れの動き」には強い結びつきがあり，「即興表現」はテーマからイメージを捉えて即興的に動くこと，「ひと流れの動き」は変化を加えてひと流れの動きにしていくことと理解されていることがわかった。さらに変化を加える視点としては，「空間」・「リズム」・「体」が促されており，「対極」や「緩急強弱のメリハリ」は授業実践の中で捉えにくい視点であることがわかった。

（３）ダンス経験差による動きをみる視線の相違

静止画を観察した際の視線パターンは，ダンス経験者の方が多くの場所を見ており，視線の移動が多いことがわかった。また，ダンス経験の有無に限らず，最初に手先足先に視線が動き，次いで体幹部に視線がうつることが共通していた。つまり，身体の末端に着目して評価することが

容易であることが示唆された。

発言内容の頻出語は，ダンス経験の有無に関わらず，つま先，手先等，身体の部位（主に手，足）に関する語が頻出であった。加えて，「伸びる」「足」「手」も頻出し，特に未経験者に特徴的にみられた。この視点は，動きの「極限化」を評価することに繋がることが示唆された。さらに，ダンス経験者の方が，着目する視点が多く，多様な観点で評価を試みていることが推察された。

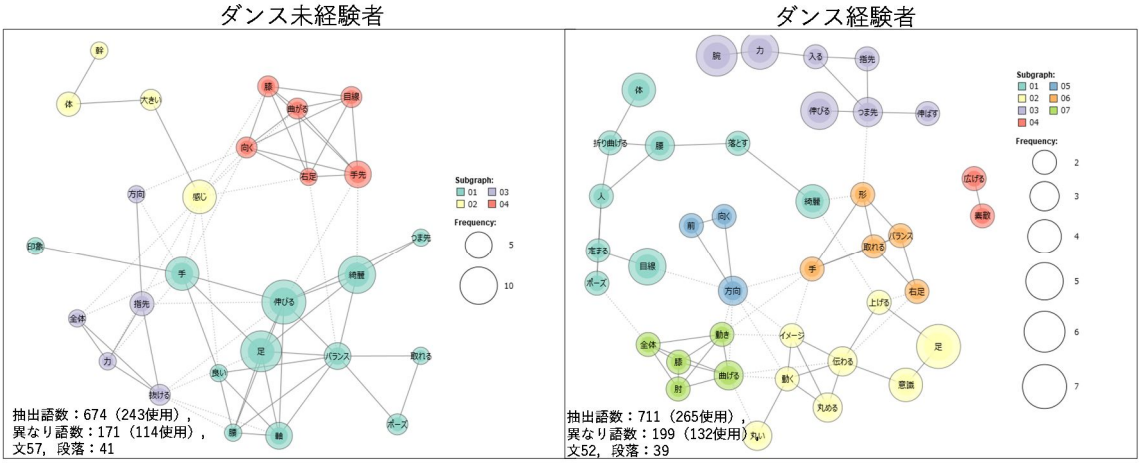

図１　発言の共起ネットワーク図

以上のことから，ダンス経験者の特徴として，多くの視覚情報を得て，動きを評価しており，評価の視点も多様であった。一方，経験の有無に限らず，身体の部位（特に手先・足先）に着目し身体を「のばす」こと評価し，次いで体幹部に視線をうつした。このことから，身体を大きく使うこと（極限化）が動きをみる際に評価しやすいことが示唆された。

（４）まとめ

創作ダンス授業における「即興表現」では，テーマから表したいイメージを捉え「ひと流れの動き」にして表現することが目指される。熟練指導者の指導からは，「ひと流れの動き」を指導する際には，「質感（イメージ）」「変化」「連続性」がキーワードになることがわかった。授業実践の記録からは，「変化」については，「空間」「リズム」「体」の視点で指導と評価が行われており，熟練指導者の指導から明らかになった「質感（イメージ）」「連続性」の視点による指導と評価は確認されなかった。さらに，視線パターンを追う実験を行った結果，身体部位（手先，足先などの身体の末端）に着目することで極限的な体の使い方をみとることが可能であった。

以上のことから，即興表現を指導する際に発揮される「動きをみる力」は，「ひと流れの動き」にしていくための指導と評価の力と換言できる。「質感」「変化」「連続性」を指導・評価するが，その際の具体的な視点としては，「空間」「リズム」「体」が動きをみるポイントとして挙げられ，さらに学習者の身体の末端と体幹をみることで極限的な体の使い方を促すことができることがわかった。

本研究では，授業実践の記録や静止画を用いた実験により「動きをみる力」を検討したが，今後はより具体的な「動きをみる力」を検討したい。また，「緩急強弱」について「力性」の視点を「動きをみる力」として具体化することができなかった。力性について，何に着目してどのような指導をするのか，今後明らかにしたい。また，当初は「動きをみる力」を高めるためのカリキュラムを作成することを目的としていたため，引き続き研究を継続し，本研究の成果を多くの現職の保健体育科要員へ伝えていきたい。

引用・参考文献

相場了（2010）今を生きる子どもたち，アイオーエム.
文部科学省（2008）中学校学習指導要領解説　保健体育編．東山書房：東京.
村田芳子（2011）表現運動・表現の最新指導法，小学館.
中村恭子（2009a）中学校体育の男女必修化に伴うダンス授業の変容－平成 19 年度，20 年度，21 年度および 24 年度の年次推移から－，（社）日本女子体育連盟学術研究第 26 号，pp.1-16.
中村恭子（2009b）中学校ダンスの男女必修化の課題-中学校教員を対象とした調査にもとづいて-，順天同スポーツ健康科学研究第 1 巻第 1 号（通巻 13 号），pp.27-39.
成瀬麻美・和光理奈・山﨑朱音・岡本雅子・山田悠莉（2014）中学校におけるダンス授業の実態とその課題について－A 県を対象として－，東海体育学会第 62 回大会.
阪田真己子・原田純子・徳家雅子（2006）舞踊鑑賞者の眼球運動に着目した感性情報処理の試み－アイカメラを用いた鑑賞 者の視線分析－，じんもんこん 2006 論文集，pp.167-172.

大橋奈希左（2013）体育における評価を問う（2）．体育哲学研究第 43 号：53-72.
山﨑朱音・村田芳子（2011），ダンス授業における指導言語と発言に至る思考の特徴に関する研究―学習者・逐語記録・指導者に着目して―，スポーツ教育学研究，30(2)，pp.11-25,
山崎朱音・村田芳子・朴京眞（2013a）ダンスの指導言語の意味から読み解く「動きをみる観点」の具体化と段階化―教材「新聞紙を使った表現」の指導を例に―，スポーツ教育学研究第 33 回大会号，p.19.
山崎朱音（2013b）ダンス授業実践に向けた実技研修の在り方 ： 静岡県内中学校教員のダンス授業の実施状況の把握を通して，静岡大学教育実践総合センター紀要 21， pp.73-81.
山崎朱音・村田芳子・朴京眞（2014a），創作ダンスの指導における指導言語の意味と動きをみる観点：教材「新聞紙を使った表現」を対象に，体育学研究，59（1）pp. 203-226.
山崎朱音（2014b）創作ダンスの授業における指導言語の特徴とその背後にある知識構造，筑波大学大学院博士論文.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 山崎朱音	４．巻 68
２．論文標題 「思考・判断・表現」の評価	５．発行年 2020年
３．雑誌名 体育科教育	６．最初と最後の頁 32-35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 山崎朱音	４．巻 66
２．論文標題 「なりきる子ども」の姿を目指す表現系ダンスの授業	５．発行年 2019年
３．雑誌名 体育科教育	６．最初と最後の頁 38-42
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 山崎朱音
２．発表標題 学習者に身に付けさせる「ひと流れの動き」の検討
３．学会等名 第３６回全国創作舞踊研究発表会
４．発表年 2016年

１．発表者名 山崎朱音
２．発表標題 学習者に身に付けさせる「ひと流れの動き」の検討（２）
３．学会等名 第３９回全国創作舞踊研究発表会
４．発表年 2019年

１．発表者名 山崎朱音
２．発表標題 ダンス経験差による動きをみる視線の相違
３．学会等名 第４３回全国創作舞踊研究発表会
４．発表年 2023年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関